

西播の蝶分布資料 (9)

岩 村 巖

わが国における比較的珍しい種類の1つであるフジミドリシジミは、その産地が交通の便の悪い山地帯である上に、食樹の関係でそれが局地的であるために、ごく最近まで、本県での分布のようすがよくわかっていなかった種類である。これまでの文献を見ても、本種の分布についてのべているものは極めて少なく、須賀ノ山における山本広一氏、守本睦也氏、吉阪道雄氏、中尾淳三氏等の記録や、扇ノ山における奥谷禎一氏、辻啓介氏等の記録があるにすぎない。

ところで、近年、採卵・飼育の技術等の進歩により冬季にも調査が可能になったのに加えて、交通網も整備され、かなりの研究者が県中央部のブナ・ミズナラ帯へと足を踏み入れるようになり、その分布のようすが次第に解明される方向にすすんでいることは大変喜ばしいことである。中でも、高田忠彦、井手敏晴の両氏によってまとめられた本県産20種のゼフィルス種の調査報告は、県下の分布の全容をつかむ上からも、又、今後の調査研究の指針という意味からも大変貴重なものである。

最近、西播の地においても冬季の採卵等による調査が活発におこなわれており、メスアカミドリシジミやヒサマツミドリシジミ等のゼフィルス類の分布のようすが次第に解明しつつある。今後、種類ごとにそれらの調査報告をまとめていきたいと考えているが、今回は新産地が発見されたフジミドリシジミについて報告しておきたいと思う。

(1) 西播におけるブナ、イヌブナの分布につ

フジミドリシジミの食樹であるブナは、日本の温帯林を代表する陰樹であり、同じ地域に生える陽樹のミズナラ等とともに安定した極相林を形成するメンバーの1つである。わが国における温帯林は、本州中部地方から東北・北海道西南部にかけての年平均気温が5～14℃の地域に発達し、ブナ、ミズナラ、カエデ等の喬木が優占種となった落葉広葉樹林になるのが普通である。一方、これより南の本州南部から四国、九州の大部分の年平均気温が14～16℃の地域においては、カシ、シイ等の常緑広葉樹を中心とした照葉樹林となる場合が多く、所によってはクヌギ、ケヤキ等の落葉広

葉樹林やアカマツ林が発達する場合もある。したがって兵庫県における植生も、平地～低山帯の大部分がカシ帯と呼ばれる照葉樹林、すなわち暖帯林となるはずであるが、伐採等の人為的条件によって、安定した極相林のままで残されている所はほとんどないのが現状である。

兵庫県下においてブナ・ミズナラ等の樹種がみられるようになるのは、日本海側で350m以上、瀬戸内側では750m以上の標高をもつ山地帯であるが、下限付近においては群落を形成するまでには致らない。ブナ・ミズナラ林としての群落を形成するためには、日本海側では700m以上、瀬戸内側では1,000mをこえる標高が必要となる。又、六甲山の一部を例外として、北緯35度以南の地域においてはブナの分布は確認されていない。現在県下においてブナの分布が確認されている所は、久斗山、三川山、小城、蘇武岳、妙見山、扇ノ山、海上、陣鉢山東斜面、須賀ノ山、床尾山、天滝（以上但馬）、篠峯、粟鹿山（以上丹波）、妙見山（東播）、音水、赤西、船越山、江浪峠、ミソギ峠（以上西播）等の地域であるが、近年の伐採につぐ伐採のために年々その分布面積は減少している。

一方、フジミドリシジミのもう1つの食樹となるイヌブナは、ブナにくらべればやや低地性の種類となりモミ等と同様に暖帯の照葉樹林と温帯の夏緑樹林の間帯をうめる代表的な植物となっている。主として瀬戸内側の500m～750mまでの山の斜面に分布しているがブナとちがって大木になることはなく、幹が根元より分枝して叢生となっている場合が多い。ブナと異なり、群落の純林となることはなく、林の中に点在して生えているのが普通である。この種類もブナと同様、近年どんどん伐採され、スギ、ヒノキ等の人工林へとかわりつつあるのが現状であり、かつての音水や赤西の溪谷の山の斜面に自生していた本種も、現在では見かけもない状態となってしまっている。

西播地方におけるこれら両種の分布についてはまだ十分に調査されていない面も多いが、現在までに確認されているものを整理してみると次のようになる。

◎ ブナについて

- (1) 千種川水系の最上部。大通峠⇄江浪峠⇄ミソギ峠とむすぶ岡山県との県境の尾根一帯

(ロ) 揖保川水系に含まれる引原川最上部。戸倉⇄音水⇄赤西とむすぶ岡山県との県境の尾根の一部。

(ハ) 千種川水系に属する船越山。

◎ イヌブナについて

(イ) 揖保川水系に属する伊沢川、梯川上流の黒尾山、梯、上ノ、奥山林道等の山の斜面一帯。

(ロ) 揖保川水系に属する公文川上流の公文、志倉等の斜面一帯。

(ハ) 揖保川水系と市川水系の分水嶺の千町峠付近。

(ニ) 揖保川水系に属する林田川上流の鹿ヶ壺。

(ホ) 市川水系に属する犬見川、小田原川上流一帯。

(ヘ) 揖保川水系に属する引原川上流の音水、赤西の溪谷の山の斜面。

(2) 西播におけるフジミドリシジミの分布について

前述の井手、高田の両氏による分布図によれば、県下における本種の産地は18箇所が確認されている（兵庫県蝶類調査報告Ⅰ、シジミチョウ科、その1）。このうち、西播地方における産地としては坂ノ谷、道谷、赤西溪谷（以上宍粟郡波賀町）と江浪峠（宍粟郡千種町）の4箇所の記載がある。上記4箇所の産地のうち千種川水系に属する江浪峠をのぞいて残り3箇所はい

ずれも揖保川水系の引原川流域に該当する地域である。同じ揖保川水系に属する一つ東の谷の公文川、倉床川等の流域からはこれまでに本種の分布の確認がなされていなかった。1982年の冬、播磨蝶友会の例会がヒサマツミドリシジミの分布調査を目的として公文川上流のモミノ木林道一帯でおこなわれたが、この時山の腹の斜面一帯にイヌブナが点在していることが確認され、合わせてフジミドリシジミの採卵調査もおこなわれた。その結果、数は多くないが、この地に本種が生息しているのが確認された。卵はいずれも食樹の小枝や新芽付近の日裏にあたる側に1卵ずつ生みつけられており、まっすぐに伸びた高所の枝よりも、横に張り出したひこばえ等の方が生みつけられている確率は高いようである。その後の筆者の同地方における数度の分布調査によれば、斜面一帯にはかなり高い所まで広範囲にわたってイヌブナが分布しており、それにとまって本種の分布もかなりの範囲に広がっていることが確認できた。

○1983. 3.18 6卵 宍粟郡一宮町モミノ木林道（岩村）

○1983. 4.6 3卵 〃

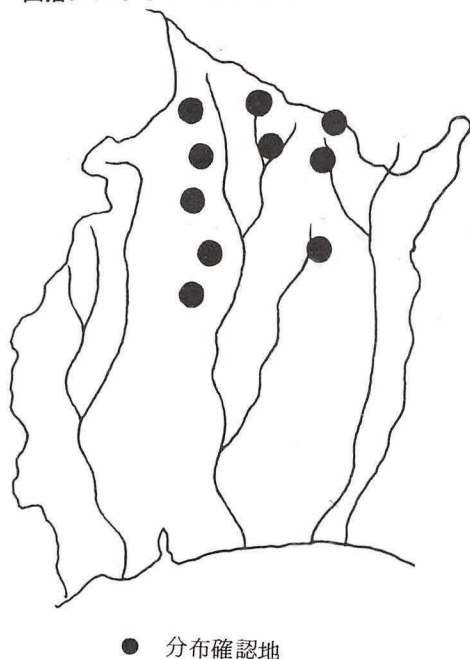
○1983. 11.23 10卵 宍粟郡一宮町モミノ木林道（岩村）

同地方におけり自然状態でのフ化は4月上旬頃には

県下のブナーミズナラ群落植生図



西播におけるイヌブナの分布

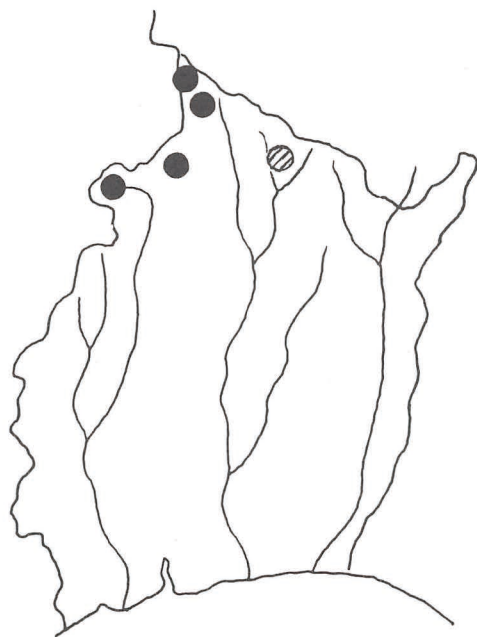


じまるらしく、1983年4月6日の調査ではすでにフシ終った卵殻が2卵発見されている。成虫の出現はそらく6月中旬頃であろうと思われるが確認できてない。姫路地方における屋内での飼育側等では5月中旬頃にすでに成虫が羽化している。1983年3月18採卵の6卵を例にとれば、3月26日～29日にかけて化がおこり、内5頭が蛹化し、5月15日に2♂16日1♂17日に2♀が羽化した。

一宮町に源を発するその他の揖保川水系に属する河の流域についてはイヌブナの分布が確認されているが何箇所かみついているが、本種の分布の確認は来ていない。今後の調査が望まれるところである。お、すでに分布の報告のある千種川上流の江浪峠、ソギ峠においても、本会のメンバーによる分布の再認の次のような採集報告がある。

○1982. 12. 19 6卵 宍粟郡千種町西河内ミソギ峠 (佐々木 他)

西播におけるフジミドリシジミの分布



● 既産地

⊗ 新産地

(3) おわりに

西播におけるフジミドリシジミの分布については本格的な調査がはじまったばかりであり、今後まだまだ足を踏み入れなければならない地域が多数残されている。特に一宮町の北部一帯のイヌブナの自生地調査がこれからの課題である。ブナの分布については、現在岡山県との県境付近の尾根すじ近くにしか樹林が残っており、その分布面積も今後予想される伐採のために減少していくことが予測されるため、ブナ帯における本種の新産地は西播においては発見される可能性は少ない。しかし、イヌブナについては、近年伐採による植林がかなりの速度で進行しているとはいえ、まだ揖保川水系に属する一宮町北部に残されている標高500～750m付近の夏緑樹林帯の中にかなりの範囲にわたって残存しているので、今後の調査によって新産地の発見される可能性はかなり高いと考えられる。今後の調査をさらにつづけたいと思っている。

——参考文献——

1. 山本 広一(1955): 但馬氷ノ山夏の蝶 (兵庫生物Vol 3 No 1～2)
2. 吉阪 道雄(1956): 氷ノ山の蝶類 (兵庫生物Vol 3 No 3)
3. 杉田 隆三(1966): 音水国有林の植物 (兵庫生物Vol 5 No 2)
4. 藤原 健司(1967): 扇ノ山のブナ林について (兵庫生物Vol 5 No 3～4)
5. 細見 末雄(1970): 瀬川山植物報告 (兵庫生物Vol 6 No 2)
6. 建部 恵潤(1970): 兵庫県宍粟郡および近接地植物分布資料 (兵庫生物Vol 6 No 2)
7. 村田 源(1970): 美方郡温泉町扇ノ山付近の植物 (兵庫生物Vol 6 No 2)
8. 兵庫生物学会(1971): 兵庫県植物目録 (兵庫生物特別号)
9. 高田 忠彦: 兵庫県産蝶類調査報告(I)
井手 敏晴(1978) シジミチョウ科 (その1) (MDKニュース No 79)
10. 日水 隆(1958): 日本産蝶類分布表 (北隆館)
11. 神戸新聞社(1974): 兵庫探検 自然編
12. 文化庁(1973): 植生図 主要動植物地図
——兵庫県——
(国土地理協会)

13. 杉田 隆三(1977): 奥山国有林のモミ林
(兵庫生物 Vol 7 No 3)
14. 大川 徹(1977): 六甲のブナ林
(兵庫生物 Vol 7 No 3)
15. 環境庁(1981): 日本の重要な植物群落の分布
全国版)
16. 環境庁 (1981): 日本の重要な昆虫類
(近畿版)
17. 四手井綱英(1978): 落葉広葉樹図譜
斉藤新一郎 (共立出版)
18. 沼田 真(1978): 図説日本の植生
岩瀬 徹 (朝倉書店)

〒671-14
IWAO IWAMURA 姫路市

シロチョウ属 *pieris* 2種の 食草について

広畑政己

県下には3種のシロチョウ属が生息しているが、いずれの種もアブラナ科を食草としていることは周知の通りである。そして、モンシロチョウはキャベツやアブラナ、スジグロシロチョウはイヌガラシを食することはよく知られており、飼育や幼虫を採集された経験も多いことと思う。しかし、これらの種については普通種であるためか、これ以上詳しく調べられていないのも事実である。このたび、西播の各地で採集してきた卵を飼育をした結果、スジグロシロチョウとモンシロチョウが発生したので、その食草を次の通り報告する。

1. モンシロチョウが産卵していた食草

イヌガラシ(夢前町坂根)、クルオメ(上月町下秋里、市川町上牛尾)、カブ、アブラナ(夢前町坂根)。

2. スジグロシロチョウが産卵していた食草

ヒロハコンロンソウ(夢前町坂根、南光町船越)、オオバタネツケバナ(南光町船越)、イヌガラシ(夢前町馬頭)、ケジャニンジン(波賀町原)、ダイコン(市川町上牛尾)。

この他にナズナ、ハクサンハタザオなどで卵を探したが発見できなかった。また、スジグロシロチョウは栽培種では発見できず、傾向としてはあまり日当りのよいところの食草からも見い出せなかった。食草の同定をお願いした頌栄短期大学の黒崎史平先生にお礼申し上げる。

Masami Hirohata 〒671-22 姫路市

木曾駒ヶ岳の蝶

苦木隆幸

焼けつくような盛夏の太陽が輝く、7月下旬播磨蝶友会では中央アルプス一帯で採集大会を開催した。今回の目玉は、ムモンアカシジミであるが、同時にツマジロウラジャノメ等も目標の中には、入っている。

1泊2日の予定で、2台の車に分乗し、中国自動車道、名神高速道、そして中央自動車道へと、夜間の高速ドライブである。もうなじみ深くなった、恵那トンネルも、一気に通過し、駒ヶ根サービスエリアで仮眠、夜明けを待った。

今回の調査地は駒ヶ岳山麓でも主として東斜面に的をしぼり、まず標高800~1,000mで前述のツマジロウラジャノメ、ウラジャノメ、フタスジチョウ、エルタテハ等をねらった。

駒ヶ根インターを下り寺沢林道に入る。朝6時前の気温は実にさわやかで自然に親しむ者のみが味わえる、幸福感を満喫する。

朝日がまぶしい駒ヶ根楽園キャンプ場附近に車を置き、本日参加の7人でいよいよ採集開始である。黒川沿いの登山道を、歩きながら木の葉がぐれに、出て来る蝶を、ネットに入れる。終日仲間と楽しく過ごし、命の洗濯をした思いで、満足感一杯の一日であった。

ネットに入った種類は以下の通りである。

1 オナガアゲハ	12 ヒオドシチョウ
2 ミヤマカラスアゲハ	13 クジャクチョウ
3 モンキチョウ	14 オオムラサキ
4 スジグロシロチョウ	15 ツマジロウラジャノメ
5 エゾスジグロシロチョウ	16 ウラジャノメ
6 コヒヨウモン	17 ヒメキマダラヒヤゲ
7 ギンボシヒョウン	18 クロヒカゲ
8 オオミスジ	19 クロヒカゲモドキ
9 フタスジチョウ	20 ヤマキマダラヒカゲ
10 エルタテハ	21 アサギマダラ
11 シータテハ	

この他に、クモバベニヒカゲ、ベニヒカゲを見ることができた。以上採集年月日は1983年7月30日である。

Takayuki Nigaki

〒675-15 姫路市